

フリーター社会は男女共同参画の理想？

安江 薫

◆重苦しかった年末年始

立春が過ぎて日差しが暖かくなるにつれて、年末年始の重苦しさから漸く解放されて気分が和らいできました。

振り返ると、派遣切りされて明日からのねぐらが無いと言う人たちが次々にテレビに登場していた頃には、コタツに入ってテレビを見ながら雑煮を食べることが悪事であるかのように感じました。また、年越し派遣村が出現したときには、世の中には奇特な人がいるものだと感心もしました。しかし一方では、志(こころざし)だけでは村長さんは務まらないだろうとも思いました。まもなく出た月刊誌を読むと、その村長さんはやはりその道に経験のある方で、村民の半分は派遣切りとは関係ないホームレスだったそうです。派遣村出現の1ヶ月ほど前には、村長さんらが催したワーキング・プアの集会に少なからぬ数の国会議員が応援に訪れたとのこと。なかには華麗な一族の一員である自民党の国会議員がいて、「貧困党を作ろうかな」と言ったとか。

◆社会や労働者派遣法を悪者にしてよいのか？

年末年始の頃はメディアが一本道を猛進していて、こんな貧困と格差を生む悪の根源は社会や労働者派遣法だと非難していたように思います。しかし、そうでしょうか。好景気のおきには見えなかったことが、大不況によって突然見えるようになったのではないのでしょうか。少し前まで、時間の制約が少ない派遣労働を好む人は少なくなく、夢を追って定職につかないフリーターはむしろ羨まれていたはず。正社員がパートより不利だと苦々しく思った時期もありました。

◆忘れられたイソップ寓話「アリとキリギリス」

景気には浮き沈みがあり、人生にもまた浮き沈みがあります。平家物語では「沙羅双樹の花の色」に例えられ、シナノ故事では「塞翁が馬」がこれに当たるでしょう。「情けは人のためならず」は、人生には沈みがあることを心に留めて、自らの驕りを戒める言葉です。

西洋には「アリとキリギリス」というイソップ寓話があり、私も子供の頃にはよく聞かされたものです。年配の方々にご存知ですが、夏に浮かれていたキリギリスは冬に苦境に陥り、夏に汗水垂らして食料を蓄えたアリは冬でも平然としていたというお話です。つまり、「逆境に備えなさい」という戒めです。日本には、昔々に輸入した「備えあれば憂いなし」や「治に居て乱を忘れず」という格言もあります。しかし、今どれほどの若者が心に留めているのでしょうか。短期的な景気の波はあったものの、大局的に見て戦後の日本は沈みを経験しなかったのですから、無理もないかもしれません。

◆新人類の出現と荒れる成人式

日本が右肩上がりに豊かになるにつれて、日本人の考え方が変わってきて、個人主義的になりました。会社のために働くのではない、自分のために働くのだ。自分の能力が発揮でき、高給が得られるなら転職するべきだ。終身雇用や年功序列はやめて能力給にせよ。……というように。こんなことを言えるのは、どの分野においてもよほどのエリートか、己を知らぬ愚か者だと思いますが、その言葉は夢を見たい多くの人々に魅力的に感じられたのでしょう。派遣労働は歓迎される労働形態であり、フリーターは眩しい存在だったのです。そういえば、だいぶ前に「脱サラ」が流行したこともありました。

こうした社会の風潮は若者に影響します。上の世代には理解できない価値観をもつ若者が現れて、新人類と呼ばれたこともありました。「新人類」は1986年の新語・流行語大賞に選ばれました。いつの時代にも、大人は分かってくれないと訴える若者はいたはずですが、とうとう言葉が通じなくなったのです。「新人類」という言葉は今では死語になっているそうですが、世代間の断絶が常態化したということなのでしょう。

バブル期には、大卒の新入社員の3割が3年後には退職しているという事態が生じ、東大工学部の先生方は多くの卒業生の証券・金融分野への就職に頭を抱えました。人材育成に使った税金がムダになったのですから、頭を抱えて当然です。

私の理解では、成人式は社会が新成人を祝福するものです。ところが、新成人が発想を逆転させて成人式は自分たちのものだと主張し始めた結果、荒れて成り立たなくなってしまいました。

◆消費者として育った若者が売り手に変わる時の苦悶

生産力の発展によって消費社会が到来し、世人は消費者と売り手に分かれました。売り手は同時に消費者でもありますが、子供は消費者そのものです。教育でさえも消費とみなされ、サービスを提供する先生は消費者である子供と親に頭が上がりなくなりました。そして、長い間甘やかされて育った若者は、学校を離れて消費者から売り手に立場を変えるとき、適応が困難で苦悶することになります。余りにも立場が違いすぎるのです。

◆青い鳥症候群

1980年頃から、若者が夢に挑戦して転職を繰り返したり、あるいは選り好みしすぎて職が決まらない風潮が目立つようになりました。この病的な風潮を青い鳥症候群と言います。メーテルリンクの有名な童話「青い鳥」から借りた命名です。当初は、甘やかされて

育った偏差値エリートを指す言葉でした。

「青い鳥」は有名な童話ですが、私が知っていることといえば、チルチルとミチルの兄妹が幸福の青い鳥を探して旅をしたが見つからず、家に帰ったら青い鳥がいた、ということだけでした。でも変ですね。小さい子供が幸福を探そうなどと考えるものでしょうか。そこで、この雑文を書くのを機会に本を読みました。折角読みましたので、次にあらすじを紹介させていただきます。ところで、アニメ「銀河鉄道999」に登場する主人公の一人の名はメーテルですね。

◆メーテルリンク「青い鳥」のあらすじ

(魔法使いのおばあさんに頼まれて) 魔法使いのおばあさんの小さい子が、幸福になりたがるというやっかいな病気にかかりました。その病気を治す薬は青い鳥です。家へやってきた魔法使いの頼みを受けて、チルチルとミチルは青い鳥を探しに出ます。

(思い出の国) 最初に訪ねたのは「思い出の国」です。そこには亡くなったおじいさんとおばあさんがいて、青い鳥もいました。いろいろ話をした後、「ときどき思い出してくれば、また会えるから」と言われて、思い出すことを約束して別れます。青い鳥は鳥かごに入れて持ち帰ったのですが、気が付いたら色が黒に変わっていました。

(夜の御殿) 次に訪ねたのは「夜の御殿」です。ここには、この世が始まってから人間を苦しめ続けた悪や災難、病気、恐れ、幽霊、病気、戦争などの秘密が閉じ込められていて、「夜の女王」が逃げ出さないように押えていました。チルチルが女王の制止を振り切って大きな扉の鍵穴に鍵を差し込むと、その扉が開いて「夢の花園」が現れました。そこには無数の青い鳥がいたのでつかまえて持ち帰りました。しかし、気が付いたら死んでいました。

(森) 「森」では、木々や動物達の精が人間に切られたり食べられたりしたことを恨んでいます。また、青い鳥を奪われることを警戒しています。チルチルとミチルは裁判にかけられそうになって、あわてて逃げ出しました。「森の大王」である柏の古木の肩に青い鳥がとまっていたのですが、つかまえる余裕はありませんでした。

(月夜の墓地) 恐る恐る訪ねた「月夜の墓地」では、死者にも青い鳥にも出会いませんでした。

(幸福の花園) 「幸福の花園」の御殿には、ふとった「幸福」の精がいて、身を飾り立てて馳走を食べていました。その精たちは、「金持ちの幸福」「見栄坊の幸福」「酒を飲む幸福」「食べる幸福」「何も知らない幸福」などです。「さあ、食べてお飲み」と招かれて、チルチルとミチルが逃げ出そうとすると、御殿は消えて「平和の花園」になりました。ふとった「幸福」たちは醜い姿が変わって、隣の「不幸の洞穴」の中に飛び込んでいきました。

そのとき、それまで気が付かなかった大勢の「ほんとうの幸福」たちが見えてきました。例えば、「健康である幸福」「清らかな空気の幸福」「両親を愛する幸福」です。チルチルは「あなたの家の幸福」に、「君の家に僕たちがいるのに気付かないなんて、おばあさんだなあ」「この子、青い鳥がどこにいるか知らないんだって!」と笑われてしまいます。

そこへ、「喜び」たちがやってきます。「正義である喜び」「善良である喜び」「仕事を上げる喜び」「ものの分かる喜び」「美しいものを愛する喜び」などです。なかでも「母の愛の喜び」は比べものがないとされています。でも、青い鳥はいませんでした。

(未来の国) この国では、これから生まれようとする子供たちに会います。子供たちは、生まれてからみんなの幸福に役立つように、長生きの薬や、羽がなくても鳥のように飛べる機械、大きいぶどうやりんごを作る方法などの発明に努めていました。チルチルとミチルがここで手に入れた青い鳥は、赤い色に変わってしまいました。

(目覚め) 1年の旅が終わって家に帰ったと思ったところで、チルチルとミチルは目を覚ましました。旅は夢だったのです。二人が旅の話をしたので、わけの分らないお母さんとお父さんは子供たちが病気になったのではないかと心配します。

(隣の女の子に青い鳥をあげるが……) そこへ隣のおばあさんが来て、チルチルの鳥を病気の小さい娘に欲しかないと頼みます。隣のおばあさんは魔法使いのおばあさんにそっくりでした。あげようと思ってチルチルが壁に吊してある鳥かごを下ろして中を見ると、鳥は青い鳥になっていました。でも、女の子と一緒に食べ物をやろうとしたときに逃げられてしまいます。

◆「青い鳥」はメーテルリンクの幸福論

チルチルとミチルは幸福(青い鳥)を探して1年の旅をしましたが、幸福そのものは手に入れることができませんでした。代わりに、幸福とは何かを学びました。たとえば、幸福は身近にたくさんあることを知ったのです。そのおかげでチルチルは自分の持っている鳥が本当は青い鳥であったことに気付いたのでしょう。

私が読んだ「青い鳥」の訳者である保永貞夫氏は解説で、メーテルリンクが何を語ろうとしたかについて次のように書いています。

「人生とは何か。人間はこの世に生まれ、どう生きていくべきか。幸福とは何か。人間は一生の間、青い鳥を追っていく運命にある。だが、ほんとうの幸福とは、自分だけの小さな幸福ではなく、他人のための幸福、さらに大きな人類のための幸福にこそあるのだ、と言っているのではないのでしょうか。それは、そのまま作者の人生観、世界観でもあります。」

◆幸福を欲しがる厄介な病気

メーテルリンクは、魔法使いのおばあさんに「幸福を欲しがる病気」は厄介な病気だと言わせています。なぜ厄介なのでしょう。それはおそらく、何が幸福が分からないのに幸福を欲しがるからです。「青い鳥」という本は100年ほど前に書かれていますが、その頃すでにその厄介な病気が存在したということでしょう。メーテルリンクはその治療薬として「青い鳥」を書いたのかもしれませんが。なお、厄介な病気とはニヒリズムではないかと私は考えています。

◆重症化する青い鳥症候群

「幸福を欲しがる厄介な病気」は、今の日本では青い鳥症候群と呼ばれます。若者の病気だと思われていますが、果たしてそうでしょうか。世の中では個人主義が進み、自由や平等などの権利の範囲が広がって、人々は欲望をほとんど抑えずに行動できます。しかし一方では、人々はますます孤立し、孤独になり、不幸に陥っているように見えます。福祉政策は生きることをある程度保障するかもしれませんが、心を満たしはしません。人々は何が幸福が分からないまま幸福を欲しがっているように思えてなりません。どうやら、若者だけでなく、日本全体が青い鳥症候群に冒されているようです。

◆男女共同参画の理想はフリーター社会では？

過去の会誌でも引用しましたが、松山市男女共同参画推進条例の前文の冒頭の文章をまた引用します。「すべての人が性別にかかわらず個人として尊重され、自らの意思によりその個性と能力を十分に発揮することのできる社会の実現は、私たちの願いである」。

この文章は実に味わい深い文章です。なぜなら、いろいろな読み方ができるからです。年末年始に派遣切りやフリーターが話題になって始めて気が付いたのですが、「個人として尊重され、自らの意思によりその個性と能力を十分に発揮できる社会」とは、まるでフリーター社会です。

男女共同参画を支持するある新聞が、3年くらい前にフリーターを温かく擁護、というより正当視する社説を載せたそうです。ある月刊誌に紹介されていたので、抜粋しましょう。

「今では、自己決定の年齢は20代後半にずれ込んでいるという。食べるために働く、世のため人のために尽くす、そんな『青年の主張』世代の職業観はもう通用しない。『自分らしい仕事をしたい』『何をやりたいのか考えたい』と若者らは迷い続ける。…(中略)…。けれども、胸の奥には大切な灯を一つや二つはともしている。今日あたり、その灯を取り出して、家族や親友にちらりと見せてはどうだろう。温かい言葉が返ってくるはずだ。」

「自分らしい仕事をしたい」とは、「自らの意思によって個性と能力を発揮したい」と同じ意味です。「何をやりたいのか考えたい」を短く言えば、「自分探し」です。「自己決定」も「自分探し」も男女共同参画でしばしば耳にする言葉です。

というわけで、男女共同参画はむしろ本格的なフリーター社会を目指したものとしか思えません。それを推進した人たちは、世の中には浮き沈みがあることを知らない愚かなキリギリスだったのです。

(平成21年2月10日着手、2月26日脱稿)